

## さつまいもの神様

— 白土松吉 —  
しらと まつきち

「秋になると、さつまいもほりが楽しみだな。」

「あまくてほくほくして：わたし、さつまいもが大すき。」

ところで、みなさんは、さつまいもの神様って知っていますか。

これは、九十年前ほどのお話です。

「あっ、いものまっつあんだ。」

「きょうも、はだしでさつまいもうえだっぺか。」

村人たちは、今日も、日に焼けて真っ黒になったまっつあんをみつけてこう言いました。

## 日照り

日が照りつけること。特に、真夏に晴天が続き雨が降らないこと。

## おかぼ（陸稲）

畑に栽ばいされる稲。りくとう。

そのころ、このあたりの農家では、おかぼ（陸稲）の栽ばいが中心でした。けれども、おかぼ作りは、たびたび日照りの害にありました。まっつあんは、日照りに強い作物はないかと考え、さつまいもに目をつ



けました。さつまいもをたくさんしゅうかくして売れば、村の人々も助かるのではないかと考えたのです。それからというものまっつあんのすがたは、さつまいも畑でいつも見られるようになりしました。

「あんなにしくなくても、どうせいもはとれるのに。」

「たくさんとれたって、さつまいもはくさりやすいのになあ。」

いつもいつも、さつまいも畑にいるまっつあんに、村人たちは、あきれてしまいました。それでも、まっつあんは、さつまいも作りにはげみしました。

（また、しっぱいだ。どうしたらもっとたくさんいもができるんだ。何かもっとよい作り方は、ないだろうか。）

## 高うね

高く盛りあげた  
うね。排水・通  
気がよいので、  
水分の多い土地  
や乾燥を好む作  
物栽培時に用い  
る。

## 千貫どり

一反（十アール）  
当たりの収穫量  
を千貫（三千七  
百五十キログラ  
ム）にすること。

まっつあんは、なえの植え方を、いろいろ変えてみたりしました。けれども、なかなか思ったようにはいきません。（いもの話し声、なき声を聞く。）と言っては、畑にねとまりしました。また、たいひのよしあしをみるために、口に入れて味をみたりして、さつまいも作りを続けました。

さつまいも作りを始めて、十五年がすぎました。まっつあんは、高うねが、さつまいも作りによいということを発見しました。さらに、十五年の年月をかけて、「さつまいもの千貫どり」ができました。そのため、日照りでおかぼが育たない年があっても、さつまいものおかげで、生活にこまることはなくなりました。



白土松吉 顕彰碑 (一の関ため池公園内)

まっつあんの願いは、とうとうかなったのです。

まっつあんは、こつこつとさつまいも作りを研究しながら、さつまいもが、この土地の作物としてたいへんよいことを農家の人たちに話して歩きました。

「なるほど、かわった作り方だな。」

「わたしもやってみよう。」

「もう、日照りがきてもだいじょうぶだ。」

はじめは、知らん顔をしていた村人たちも、真っ黒な体で、熱心にさつまいものすばらしさをとくまっつあんの話に引きこまれていくのでした。

こうして、まっつあんこと、白土松吉は、村人たちから「さつまいもの神様」とよばれるようになったのです。

出典 (茨城県道徳郷土資料集) 茨城県教育委員会

## 白土松吉

明治十四年(一八八一年)現在のひたちなか市に生まれました。農学校を卒業後、那珂郡役所の農業指導員しどになりました。その後サツマイモの増産に力を注ぎ「千貫取り栽培法」と言われる方法を開発し、サツマイモの神様と呼ばれました。

那珂市の農業会の支部長を経て、「白土甘藷研究所」かんしよを開設し、研究に一生をささげました。



「那珂市ゆかりの先人たち」より